

文化

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家

〈67〉

本連載の前回(8月20日) さつ文を所望していたとい
掲載)で記した、平和の礎 うことを耳にしていたの
の除幕式典における朝鮮・ で、いま本執筆にあたり、
韓国の代表あいさつ文は、 「村山談話」との関連性に
帝国日本に侵略・占領され 思いあつた。

たアジア諸国の人たちの思 にわかに「村山談話」を
いも凝縮しているといえる 読みかえした。その肝要部
内容だった。わたしは、つ 分は「国策を誤り、戦争へ
い最近当時の関係者から の道歩んで国民を存亡の
日本政府が事前にそのあい 危機に陥れ、植民地支配と



平和の礎に刻銘される戦没者の名前を確認し、供え物を
して手を合わせる人々。同様の光景が建立当初から確認
された。1995年12月、糸満市摩文仁の平和祈念公園

侵略によって、多くの国々、 平和実現への決意」、「村
とりわけアジア諸国の人々 山談話」では「未来を望ん
に対して多大の損害と苦痛 で、人類社会の平和と繁栄
を与えました」一疑うべく もないこの歴史の事実を謙
虚に受け止め、ここにあら ためて痛切な反省の意を表
し、心からのお詫ひの気持 ちを表明いたします」の部
分である。朝鮮・韓国の代 表に述べたといえる内容に
なっている。

平和の礎⑨

慰霊・追悼、記録の場に

戦争悲惨さ伝え、平和希求

遺族の思い

除幕直後のテレビや新聞
のニュース、人々の話を通
して知る平和の礎に対する

しているとき、島尻で被弾 死した。それぞれ生前顔を
合わせたことがなかった夫 と美父が並んで礎に刻まれ
ているのをみつけた。「そ れで、「ここで初めて出会え
たのだね」と、二人の名前 をなでて感極まっていた映
像が流れていた。

〈事例2〉近所の少年時 代から知る沖縄戦当時9歳 だった女性が「母親らと妹
を背負って島尻の戦場をさ まよっているうちに背中の
妹は弾にあたって死んでし た。

〈事例3〉空手道場主で

とりのおじの死を嘆き悲し 想である。関係者の名前を
んでいた。たいへん気 なぞって、涙しながら故人
になっていた。そこで「平 を偲ぶ光景は一般的であ
る。

「機能3」は記録碑とし ての役割である。わたした
ちの一家(5人)と伯父二 家の7人は、奇しくもひ
とりの戦争死没者も出して いない。しかし、わたしの
楊姓中宗家(現在の跡目は 筆者)の先代跡目が中国戦
線で戦死していた。その名 前の確認のため、除幕して
半年後の正月3日、わたし の父を夫婦で平和の礎に案
内した。ところが、その先 代跡目の名前を見つけた父
は「このひとだ」と指さし て、名前をなぞることもな
く美にたんたんとワイフに 説明していた。その瞬間、
将来刻銘されているひとと 直接的に接していないひと
だけになると、ひとの存在 を表す名前によって戦争の 悲惨さを伝え、平和を希求 する場という役割が大きく なるのだろうかと思えた。

碑のもつ機能

当時、日本社会党の村山 遺族の思いは、わたしの想
首相や土井たか子衆議院議 像をはるかにこえていた。
長は、その翻訳文をしかと 読んだはずだ。6月23日の
除幕式典から2カ月も経っ ていない8月15日、敗戦か
ら50年にアジア諸国にむけ た「村山談話」は、それも
参考にしたのではなからう か?

韓国のジョン・テギョン さんは「世界平和と和睦の
道へ」、朝鮮のキム・スン ブさんは「アジアと世界の

まいったが、しばらく妹が亡 くなっているのも知らずに
背負いつづけ、そのうち異 変にきづいたが、その後も
遺体を背負ったまま逃げま どっていた。それからだい
ふたつた後、母親が背中の 妹をどこかに埋めてきた。

もある大学同僚の話であ る。その弟子たちが米国で
沖縄空手道場を開いている が、ときおり沖縄へ研修に
やってきた。平和の礎が除 幕した年にも米国から研修
に来た米国人空手家のひと りには5人のおじがいた。

第二次世界大戦時、2人は ドイツ戦線へ、3人が太平
洋戦線へ出征した。4人は 復員したが、ひとりだけが
沖縄戦で戦死した。戦後生 まれの子は、親族がひ

「墓祝いの歌」を三線で奏 でていくひとたちがいた。
また、重箱や供え物を、 清明祭で墓前に手を合わせ
るような場面も当初からよ く見かける姿である。(写
真参照)

「機能2」は、追悼・追 想である。関係者の名前を
なぞって、涙しながら故人
を偲ぶ光景は一般的であ
る。

「機能3」は記録碑とし ての役割である。わたした
ちの一家(5人)と伯父二 家の7人は、奇しくもひ
とりの戦争死没者も出して いない。しかし、わたしの
楊姓中宗家(現在の跡目は 筆者)の先代跡目が中国戦
線で戦死していた。その名 前の確認のため、除幕して
半年後の正月3日、わたし の父を夫婦で平和の礎に案
内した。ところが、その先 代跡目の名前を見つけた父
は「このひとだ」と指さし て、名前をなぞることもな
く美にたんたんとワイフに 説明していた。その瞬間、
将来刻銘されているひとと 直接的に接していないひと
だけになると、ひとの存在 を表す名前によって戦争の 悲惨さを伝え、平和を希求 する場という役割が大きく なるのだろうかと思えた。

本項に関しては、石原昌 家/新垣尚子「戦没者刻銘 碑「平和の礎」の機能と役 割」(『南島文化』)沖縄国 際大学南島文化研究所紀要 第一八号)に詳述して いる。(次回9月後半掲載予定)